

淨

土

目次

表紙・巻頭カット……月岡榮吉

皇國佛教の使命……(巻頭)

大東亞のころ

……大川周明……(一)

女性出陣

……吉田絃二郎……(四)

日本人の信仰

……林靈法……(一〇)

不斷の力

……後藤真雄……(七)

實話法の時雨

……石橋徳作……(三)

信仰相談

……(五)

至心に懺悔す

……(八)

歌壇

……岩野喜久代選……(三)

俳壇

……太田耳動子選……(三)

皆得休息皆蒙解脱

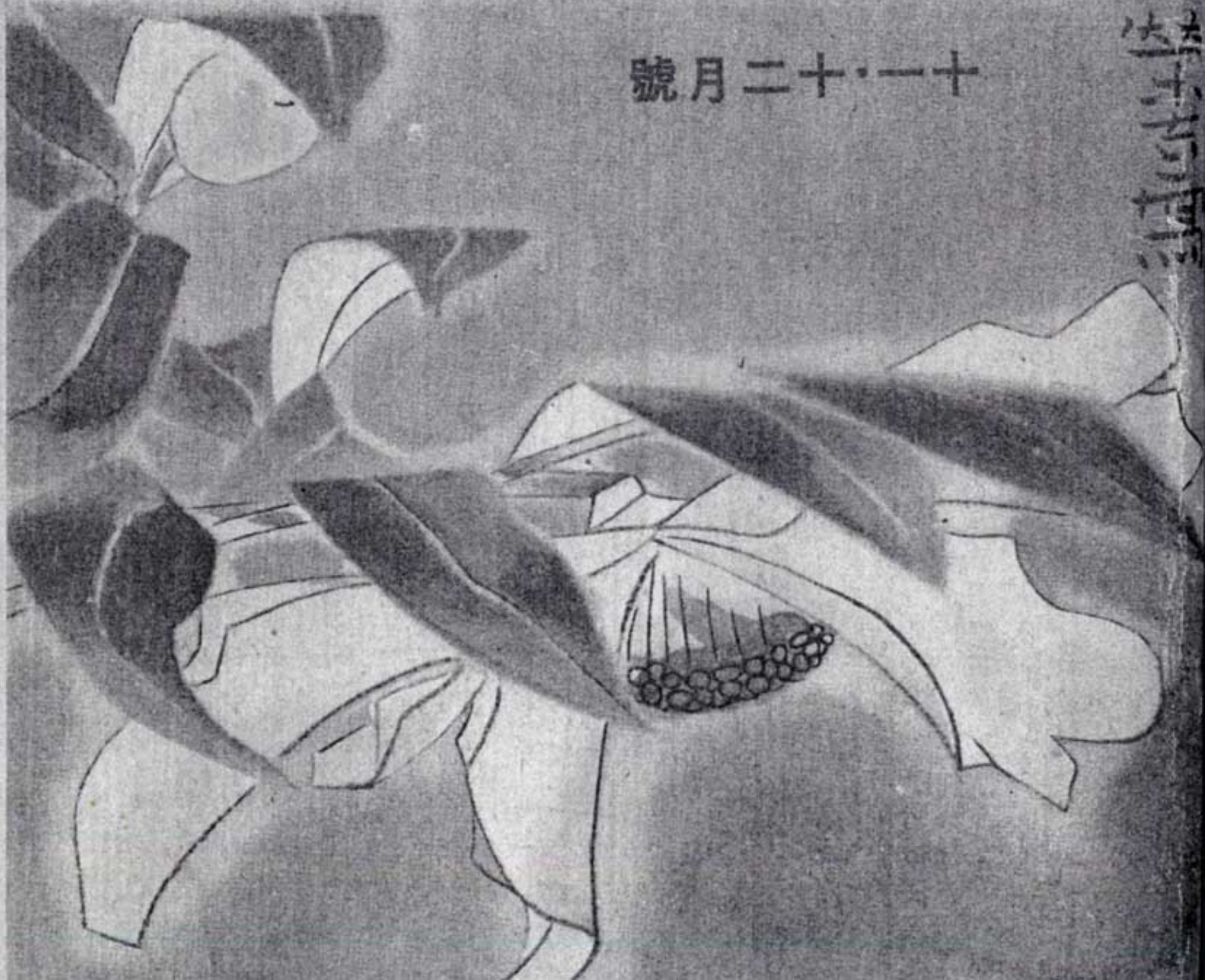
……中村辨庵……(一〇)

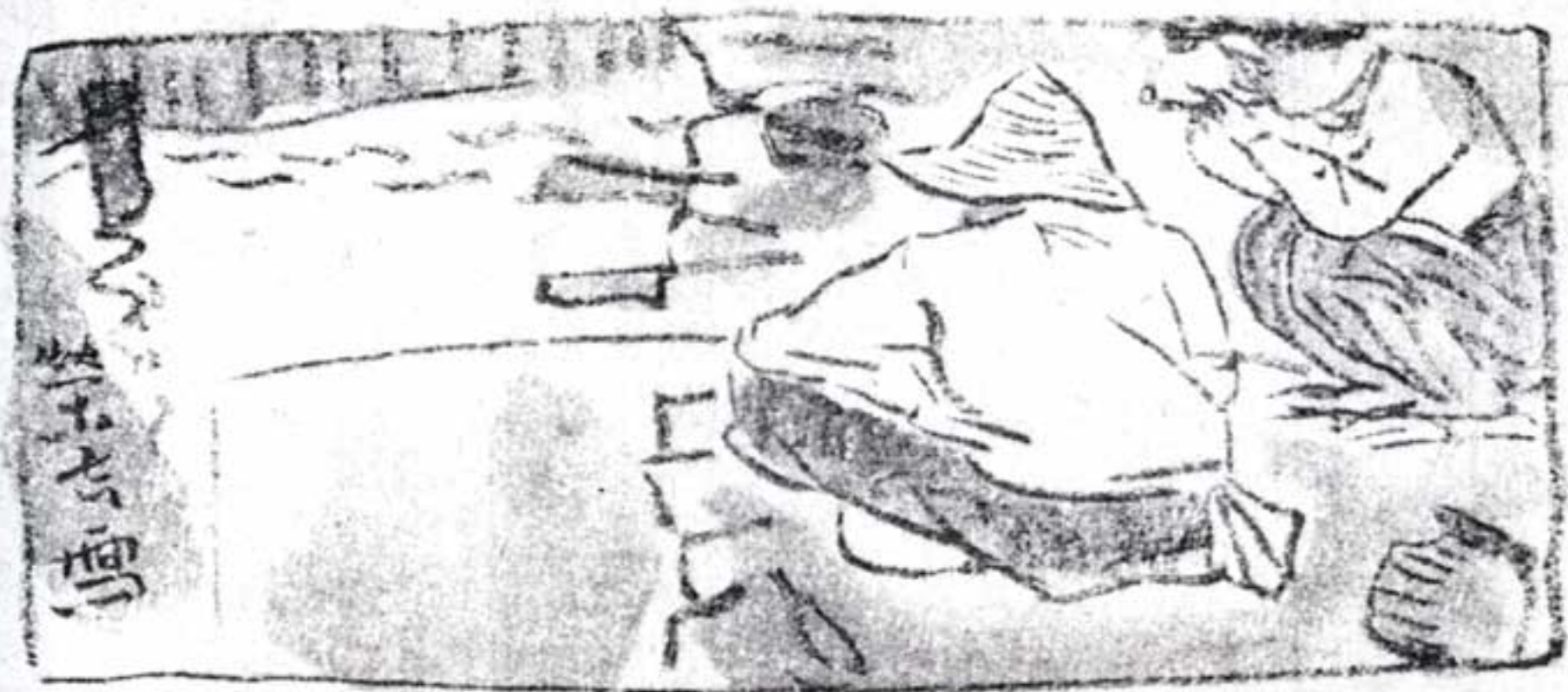
編輯後記

……(三)

十一月二十號

淨土





皇國佛教の使命

比島から臺灣、沖繩と戦線は日本領土に於て展開されるに到つた。獨斷米艦隊は大舉臺灣に迫つたが、痛烈な皇軍の反撃に潰滅的打撃を蒙り敗退した。しかし第二次、第三次と物量を誇る彼等は繰り返し侵攻を企てるに相異なる。我等亦それあるを期して尙一層航行機を初めあるゆる兵力を充實させなくてはならない。皇國は斷じて勝つのである。

忠勇なる將兵の善謀善戰によつて敵米英を大東亞諸地域に近づけぬことを確信してゐる。それにつけても、われらは佛教徒としてますます重大なる責務を感ずるのである。皇國を指導者として大東亞諸民族が大東亞を建設してゆく以上、學術上に思想上に信仰上にあらゆる方面に亘つて、われ／＼は彼等に與へつつ指導してゆかねばならぬ。何故なら與へるものなきものが、指導者としては起ち得ないからである。

幸ひわが皇國佛教は一面皇國たるの特色を發揮してゐるが、他面世界各佛教の粹をことごとく集め終つてゐる。従つて世界思想上のあらゆるものが皆佛教の中にありとさへ云はれてゐる如く總ての方面に對し佛教思想を以て事足りるのである。またわが國美術文藝等の文化は佛教により代表され、これ亦世界に比類なきものである。他のことは暫くおいて少なくともわれ／＼は佛教とその文化をもつて十分大東亞諸民族に臨み、與へて彼等を満足せしめ得ると信ずる。しかしこれは佛教徒自身の自覺と確信、不惜身命の活躍とに待たずに實現されない。アンコールワットや大同石佛が如何に壯麗であつても、ただこれだけでは一個の遺物であつて佛教文化としては全然齟いてゐない。われわれに直接必要なのは血のかよつた躍動せる文化である。先づ以て自信を持たうではないか。



大東亞のこころ

法學博士 太川 周 明

支那事變以來忠勇なる將兵によつて赫々たる戦果があげられ、大東亞戦争が宣せられるや、またたく間に大東亞諸地域から敵米英を追ひ拂つてしまつた。しかしこの軍事上の大戦果と平行して、精神的方面の成果がはたして十分にあげられたであらうか。遺憾ながらこの方面は甚だ芳しくなく、現在に至るまでいろ／＼な意味で缺くところがあつたと云はねばならぬ。大東亞共榮圈の建設は軍事的成果によるのみならず、それと同時に強くて高い精神がなくてはならず、この點からもわれわれの前には未だ幾多辛苦嶮阻の道が横はつてゐるのである。

それといふのもこれまで大東亞諸國に關して餘りにも貧弱な知識しか持つてゐなかつたといふ所に原因がある。殊に近世になつてからますます知識の貧困の度を増したとさへ思はれるのである。明治維新前までは、われわれの世界といへば唐天竺とわが國の三國だけだと考へられてゐた。われ／＼の意識、即ち日本意識は三國意識であつて、大東

亞精神によつて總ゆる生活の基底が形作られてゐた。例へば美しい花嫁のことを「三國一の花嫁」と稱し、富士山を賞めるにも「三國一の富士の山」と云つた如く、當時の世界と云へば東亞の三國だけに限られてゐた。印度から支那へ、そして日本に渡來した佛教はわが國の進展とともに發達して千五百年に互つてわが國の精神界を養ひ、支那の儒教はわが國倫理のもとをなし、ともに日本の魂を育てるに重要な糧となつてきた。日本精神は當然それによつて育てられ、われ／＼はその中で大東亞的生活を営んできた。しかるにやがて西歐文明が移入されることになり、從來の生活基礎は根底からくつがへされてしまつた。一切の學術研究は西歐のそれであり、大東亞精神にと更に一層究明さるべきものがあつたに拘らず、逆に大東亞に關しては甚だしき知識の貧困を招いてしまつた。もとより漢學者なり佛教學者なりによつて古い東洋思想の研究は續けられてゐた。とは云へ、それはあくまで東洋の古典についての研

究であり、動かざる思想形骸の發掘にすぎなかつた。従つて當然、現實の東亞、目前の支那や印度に關しては驚くべき貧弱な認識しかなくなつてしまつた。滿洲事變以前に於ける日本人のこの方面の認識は過ぎ去つた古い時代の東亞か、或ひは又宣傳等によつて曲げられたものでしかなかつた。

そのよい一例として浙江財閥に對する誤解がある。以前には浙江財閥といへば蒋介石政權の後援者であり、その走狗の如くに考へる者が多かつたが、かく考へることすらが蒋介石等の宣傳に乗せられてゐるので、事實は全くその反對なのを知らずにゐた。浙江、江蘇の兩省は、昔からことに覇を唱へた者はやがて天下を制すとさへ云はれた位に支那の中軸を占めてゐる。浙江財閥といふのは元來この浙江、江蘇地帯に地盤を有する土豪たちの集りであつた。そして國家の恩恵を蒙ること極めて少い支那にあつて、彼等は自分達の財と地位を維持してゆくため、自分の土地に對しては厚い仁政を施してゐた。それによつて民心をつないできたのである。彼等にとつては仁政を施す以外に彼等自身の保全をはかる途がなかつたのも當然であらう。

この土豪たちを集めて一つの勢力となした人は、丁度松平定信と二宮尊徳とを一緒にしたやうな張譽なる仁者であつた。彼は鹽懇綿鐵と云つて、製鹽業、開懇による綿作、

綿織業、鐵によつて代表される重工業の四大産業を興發することを目標をおき、土豪達の間を奔走して彼等を打つて一丸とする一の大勢力をつくり得た。そのおかげによつて今や浙江財閥は產業界に金融界に抜くべからざる確固たる基礎を扶殖することが出來たのである。

さて蒋介石は北伐に成功し、國民黨勢力を中支に移さうとするにあたつて、先づ浙江財閥と衝突してしまつた。そこで蒋介石のとつた手段は恐喝、惡宣傳等あらゆる方法によつて彼等を壓迫し誹謗するにあつた。それでも思ふやうにならなかつたため遂には藍衣社を用ひての脅迫手段まで講じて彼等を屈服させてしまつた。かくの如く蒋介石から非常手段を以て當られた浙江財閥は蔣に對し恨みこそ抱け、決して好意を持つてゐるわけがなかつた。特に事變後にまで和平地區に残つた浙江財閥人の如きは明かに蒋介石の反對者であり、大東亞共榮圈建設の有力な協力者たるべきものであつた。それなのに彼等を蔣と同類としかみなかつた日本人達の認識は誤謬も甚だしかつた。

また支那人に對し一概に嘘付きである如く思ひ、自己主義の惡徳者のやうに云ふのも事實と極めて相異してゐる。支那の土地に行つて先方から積極的に働きかけて來る支那人は多くブローカー又はごろつきの類で、德義も信義もない輩が多く、これら仲介者を通して一般の支那人を判斷

する所から誤つた考へ方が生れる。若しかゝる誤解を基礎とし、或ひは先入観として支那に對し行動をとつたとしたら、その結果たるや如何なるものになるか論をまたぬ。

法律とか秩序とかの保たれ難い支那にあつて、とにかく日常を営み得てゐる支那社會は何んによつて生活を律し、社會の保全を維持してゐるかといふに、それは「信義」を重んずるといふ一點にある。幾十萬の商取引も口約束一つで立派に履行してゆけるのも「信義」があればこそで、信義なくして支那社會は一日も暮してはゆけぬのである。

以上のことはほんの一例に過ぎないが、こうした正しい認識を日本人の一人一人が果して持つてゐたであらうか。大東亞建設に當つて、精神的方面に不十分な所のあるのは先づ第一にこうした認識に缺ける所があり、精神的準備に不足があつたからだと云へる。戦局はまさに苛烈であつて、東亞民族による東亞建設の大業がなしとげられるか、又は米英の侵略に東亞をゆだねるかの岐れ目に來てゐる。勿論軍事的には最後の勝利我れにありと確信してゐる。しかし更に一步を進めて東亞が東亞民族によつて律せられるために、支那人も印度人も日本に對して深い理解と期待とを持つてゐることを知り、指導者たるの地位に自覺を持たなくてはならぬ。依つてわれわれは大東亞建設の大業完遂のため現前の東亞をまず／＼深く認識し、それによつて精

神的力量の涵養に努めなくてはならぬ。指導權を持ち、事實東亞を指導する責任ある地位にあるわれわれは、十分なる指導能力を發揮してゆくため、この上ともに精神的方面にも力を注いでゆかなくてはならぬ。

この精神的力量を何んによつて充實してゆくか。この點に於て私は宗教家の躍起奮勵を切望してやまないものである。申すまでもなく佛教は大東亞諸國に浸透して偉大な勢力を持つてゐる。上海激戰當時に支那の青年僧五、六名が彈丸雨飛する間をとび廻つて敵味方の區別なく屍に土をかけてゐたが、支那にもこうした強烈且つ純粹な信仰が存してゐるのである。日印支の三國を結ぶのに最もよい絆となるものが、この傳統に培はれた佛教信仰ではなからうか。降魔の利劍をふりかざすと同時に、大東亞の同胞を深く思ひやり、いつくしんでゆく大慈悲大愛の心が必要なのである。この明るさ、やさしさ、一切を包む大いなる力は佛教精神によつて養はれる。軍事的力にすぐ随伴して精神的力が進んでこそ初めて大東亞共榮圈が完成するのである。大東亞のところが發現されて、大東亞諸民族が一つ絆で結ばれるならば、自づと大東亞は建設され、米英が如何に跑かうとも恐るる所はないのである。しかもこれこそわれわれにとつて可能を可能ならしむる唯一の途なのである。(文責在記者)



女 性 出 陣

吉 田 絃 二 郎

今日ではたくさんな若い女性たちがそれ／＼の産業に従事してをられますが、つい最近まで日本の女性と軍需工場とを結び付けることは多少の不安を以て見られてゐました。然るに一年経つか経たない間に、人々の豫想を裏切つて、日本の女性には軍需工場の生活方面に於ても見事な成績を挙げました。たとへば滋賀縣の某紡績工場では殆んど女ばかりで飛行機を作り始めましたが素晴らしい成績を見せてゐるといふことであります。数日前の新聞には全然素人の若い女が、工場へ入つて来て最初から困難な機械作業をやらしてくれと言ひ、わづか六日か七日の後には一日に部分品六個を作りました。しかも六個とも完全な製品でありました。普通一人前とよばれる職人で一日五個のところをこの若い女性は一六個を作り上げたのであります。一人前の職人になるには少くとも幾年かの年季を入れなければなりません、この若い女性は一週間で一人前の仕事をするやうになつたのであります。紡績工

場の女工さんたちの話といひ、この若い女性の話といひ洵に驚威といふべきであります。

それならばこんな事は例外であるかと申しますと、さうではありません。挺身隊で出かけて行く人たちの間にも到る處に見出さるゝ現象であります。受入れ側の人たちは學生は呑み込みが早いからと申します。それもありませう。しかし更に根本的なことは時局に對する認識の深さ、何としてもこの國を守らなければならぬといふひたむきな魂が、若い人たち、或は若い女性に驚威的な、超人間的な仕事を完成させるのであります。これを維新前の佐久間象山先生に例を取つて見ますと、國を憂ふる先生にとつては一日も早く、虎視眈々と日本をねらつてゐるアメリカやイギリスの兵器工業、科學、國防、兵備の實際を知ることが必要であつた。一日早く敵の武器を知れば一日早く敵を壓することができる。そのためには一日も早く蘭書を読む必要がある。弘化二年三十四歳の先生は非常な勉強の



結果わづか一年足らずで、自由に和蘭の書物を讀むことができられたのであります。三十四歳の晩學者：：無論天稟の才能はあつたにしても、一年足らずして自由と和蘭の書物を讀む力を見出されたといふことは、この國を守らなければならぬといふひたむきな一念が燃え立つてゐたからであります。さればこそ不可能を可能としたのであります。わづか三十年そこそこで清國に勝ち、つゞいてはロシア帝國に勝つたのは佐久間象山先生始め多くの先輩が不可能を可能ならしめる努力をされたからであります。この努力に伴ふてのみ神風は吹くのであります。

今日は普通一遍の努力や頑張りでは足りません。神風を巻き起すほどの努力がなくてはなりません。ほとんど女ばかりの飛行機工場の人々といひ、この一週間そこ／＼で一人前以上の仕事を覺えた女性といひ、たしかに神風を起す人たちであります。今日この利那から日本中の若い女性たちが男性とともに神風を起すほどの製産をして下さつたら、アメリカの艦隊もイギリスの艦隊も弘安四年の外敵の二の舞を演ずることは間違ひありません。全國の若い女性たちに對して、その一人一人が神風を起すほどの、不可能を可能ならしむるほどの勇猛心と、自信とをお持ちになることを願

ひします。

先達て私が親しくしてゐる和田正系博士は一人娘の令嬢を二ヶ年勤續で、或る町の某工場へ送られました。生れて初めて御兩親の許を離れて旅立つお子さんとしてはいろいろなことも考へられたのであります。日本の家族生活の温かい摇篮の中に育てられた娘さんと、かのアメリカあたりの父は父、母は母、子は子といふやうな個人主義の中に育つたヤンキイ娘の家を出て行く氣持の間には雲泥の差があります。しかも今日は日本中の父も母も娘さんも私の情愛を斷ち、一つ心になつて御國の爲に、御國の存亡を賭けたこの戦さに打ち勝つためにと、家を立ち出でて産業の戦陣へと急いでをられるのであります。軍人の出陣と何等の差もないのであります。

和田博士は令嬢への出陣のはなむけとして、一首の歌を贈られました。

垂乳根の母が手はなれ今日よりは

みくにのをとめ家なおもひそ

この歌は博士一人の親心ではなく、恐らくその愛し子たちを生産陣へ見送る日本中の親御たちの心であります。意氣込みであります。

今日よりは御國のをとめ家な思ひそ。御國にさゝげ



まつつた若い日本の女性たちは今や、全國津々浦々に、白鉢巻の凛々しい姿で飛行機を作り、食糧増産に進軍しつゝあるのであります。

×

×

ロシアでは百萬の婦人が第一線に活躍してゐるといひ、或は工場に働く人は大部分女であるといひます。敵アメリカでさへ多數の婦人が戦線に出てゐると申します。かういふ點に於て日本は遺憾ながら立ち遅れてゐます。

しかし父にはなむけの歌を贈られて生産陣に馳せ向ふといふやうなやさしい、凛々しい女性といふものは日本以外に世界の何處にもありません。神風を起させるほどのひたむきな愛國心にたぎり立つた女性は世界の何處にもありません。わたくし共はこの點に於て日本の若い女性たちに心からなる感謝をさしげます。たのもしさを感じます。

このごろの若い男性たちは空に海に陸に決然として駆けつけてゐます。「僕たちが守らなくて誰れが守るのだ。」と申してゐます。この言葉は短いですが、胸を貫きます。今日尙ほ利潤を求むる重役や仕事を怠ける者があるとするれば、憎むべき非國民であり、國賊であり

ます。かれ等にして純眞な若い人たちのこの短い、しかも神のごとき言葉を聞いたならば、まさに愧死すべきであります。

全國の若い女性たち。あなた方は若い異性に劣らぬ、けなげな決心を以て、立ち上り、今夜もまた轟々たる機械の前に持場を守つて戻られるでありませう。まことにありがたくお禮を申します。あなた方のお父さんお母さん方もまだ寝ねずあなた方が御國の乙女として一發の彈丸でも多く作つて下さるやうにと念じてをられるでせう。

あなた方はこの前古未曾有の聖戰に、その有力な参加者の一人として陣頭に立つてをられることを心から乙女のほこりとしてをられることと信じます。若き女性、若き戦士としての誇りを忘れてはなりません。命も名譽も欲せぬ若人たちは空に海に陸に神風を巻き起さんとしてゐます。若い女性たちよ、この國を守るのはわたくしたちだといふひたむきな、神のごとく純眞なあなた方の美しい心によつて驚威的な御奉公をなさつて下さい。そこに神風があります。そうしたら必ず米英を叩きつけることはできます。おからだを大切にしてください。何としても米英を叩きつける迄はたはれてはなりません。

不斷の力

後藤 眞雄

東京産報の會の時だつたと記憶してゐます。宇野圓空先生でしたか「力」の入れ方にも色々ある。例へば板に釘を打つ時には金鎚で打ち込む、レールの上の貨車を動かすには、しつかり足を踏んばつて肩をあてゝ、ヂワ／＼と押すと動き出す、貨車は金鎚でたゞいても動かないし、釘は肩で押しても打ち込むことは出来ない。」と云ふ例を引いて力の入れ方についての話がされた事があります。

面白い話と時々想ひ起すことですが、本當に力の入れ方にも色々あるものです。親方の一時力で「そんな鉋の持ち方で板が削れるか。腰をおとして、足をふんばつて、一寸借して見ろ、こう云ふ風にやるんだ」と馴れない小僧に小言を云ひ乍ら、カツとした一時の勢ひでシュツ／＼と削る物凄い親方の力はそんな

に永く續く事ではありません。板の二三枚も削ればフウ／＼云つてしまふものです。然しだれる小僧に新しい力をつける事には成功します。僕の腰を締めるには唯力一杯引張るだけでは締まるものではありません。やはり一寸ゆるめて置いて拍子をつけてグツと締める、こんな力の入れ方もある、又指一本で何回も力を入れたり、抜いたりして遂に大きな釣鐘を動かした多聞丸の話の様な力の入れ方もあります。

鐵の棒をまげる力、竹をためてまげる力、夫々力の入れ方にもいろ／＼とコツがあるものです。

戦争もだん／＼と永くなつて來ると、いろ／＼な方面でいろ／＼な力が要求されてゐます。もとより第一線將士は忠勇義烈の力

にすこしのゆるみがあつてはならない事です。同時に銃後に於ても戦意の昂揚、生産力の増強、食糧の増産等夫々に力が要求されてゐます。もとより日本國民として一人として何かのお役に立ちたい、力を出したいと思はない人はおりますまい。然しその力の入れ方に釘を打つのに肩をあてがふ様な、貨車を動かすのに金鎚をふり上げる様な、云はゞ骨を折つてしかられる傘屋の小僧の様な轍を踏む事もないとは云はれません。

法然上人の唯ひたむきに念佛を勧められた御一代には私共唯々恐れ入るばかりです。その根の良き、根強さと申しませうか、わき眼もふらず唯念佛にたよられる。「専ら念佛せよ」「念々に相續して忘れざれたゞ一向に念佛すべし」只一筋に念佛すべし等々何と云ふ恐ろしい力でせう。何物をもはじき飛ばす力です。鶴の毛でついた程のすきもない力です。この不斷の力こそ私共の今日學ぶべき力です。

眼のくらむ程一生懸命に働いて、二倍三倍の仕事は出來ても翌日から三日も四日も休まなくてはならぬ様な事になつては本當の能率

をあげたとは云はれないのです。酒を配給したり、物の配給をしたりして一時的に能率をあげた處でのど元すぎれば熱さを忘れて、次の配給まで力が抜ける様な事では本當の力が出たのではない。もとより物資の少ない今日物の配給で無限の力を出さうとした處で無理の出て来る事は當然です。いくら力を出してもつかれない力でなければ駄目です。

法然上人の念佛にどこにつかれが見えませう、四國遠流は上人の念佛を益々力強くしたのみです、益々強くなつて来る不斷の力でなければ駄目です。

統後の力はこのヂツクリとした重い貨車を動かす様な力が必要です、然もレールは今上り坂にさしかゝてゐます、この峠を越す處まで力をゆるめず押し通す處にあります。疲れたり倦んだりしては駄目です。人心ヲシテ倦マザラシメシコトヲ要ス」です。

×
それこそ不斷の力です、それはその儘いつもの平生の普斷着です。他所行の力ではないのです、地についた、何でも無い、別に特別に意を用ひなくとも自然の儘に出てゐなければならぬのです。

×
先日私は九州地方を巡講して歸つて来たばかりですが、再度の空襲を受けた九州地方の人心が、東京で想像してゐたとはまるで反對に頗る落ちついてゐるのにびっくりした事です。

一度二度と空襲をうけると空襲が特別の事でなく、不斷の事となるのです。防空が不斷の力で行はれる。そこに地についた落着が見られるのです。

×
聖德太子は十七條憲法に「公事はもろきこと難かし、終日にても盡し難し」とちつくりとした不斷の努力なくしては到底盡し難い事を示しておられます。同じく「上和ぎト睦びて、事を論ずるに諧へば、則ち事理自ら通ず、何事か成らざらん」と或は「詔を承けては必謹め」
「百姓禮あれば國家自ら治まる」

「明かに訴訟を辨めよ」
等々其の示される十七條は正に不斷の力を出す足がためを示されたものです。そこには少しの無理もなく、自ら不斷の力を産み出さずに置かないものが見られます。然もその

至心に懺悔す

われ／＼佛教徒は朝に夕に佛前に跪いて懺悔する。その懺悔偈に曰く

「われ昔より造る所の諸々の惡業は、みな無始の貪瞋痴に由る。身語意よる生ずる所なり一切我いまみな懺悔し奉る」

懺悔こそ身心を清め、新たなる氣力を生ぜしめる。反省が深ければ深い程、至心に懺悔せずにはゐられない。これこそわれ／＼佛教徒の一つの特色である。

ところが現下の世情をみると、餘りに懺悔する心情に缺けてゐることに氣がつく。懺悔は佛の御前にてなすものであるが、これは人に向つては己が力の足らざるを詫びる謙虛な氣持となつて現れる。この氣持が不足してゐるため、何かと云ふと互ひに角をつき合つて喚くことゝなる。己が非を省みずに喚く聲の如何に大きく耳につくかを知れば判る。
或る人の言に「我々の心に割り切れぬもの残るのは、爲政者の無反省の態度に由來する。若し縣知事から、一言自己の非を責め、申し謝らないと云ふ釋明を聞いたら、假令物は

根本に

「驚く三寶を敬ふべし。三寶とは佛法僧なり、則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何の世何の人か是の法を貴ばざるべき。人、尤だ惡しきは鮮し、能く敬ふれば從ふ。其れ三寶に歸せずむば、何を以てか狂れるを直せむ」と第二條に示された通り寫敬三寶こそが不斷の力の足がかりです。

×
貨車を押す肩にいくら力が入つても足もと

がくづれて行つたのでは貨車は動きません。脚下照顧です。自分自らの強い宗教的な反省申譯ない、相濟まない、と止むに止まらない固い足がかりがなくて何で力が入りませう。

たまさかに配給される物資を「こんなにもでして頂いては」と反省する處にこそ足にも肩にも力が入つて來ます。力を入れずにはおられない處にこそ不斷の力が出て來るのです。念佛を申さずにはおられない法然上人の何處に疲れが見えませう。何處に念佛に倦む姿が見られませう。

入れ様と思つて入れる力でなく、力を入れずにはおれなくなる處に不斷の力はあるのです。

×
油斷のならぬ大敵を向ふへまわしてゐる今

日、銃前に銃後に不斷の力が要求されてゐる今日、その力を出す根底は強い宗教心に足がかゝつてゐなければ駄目だと信じます。

うそや、いつはりでは普斷ではありません他所行です。強い信力なしには飽きが來ます、物めづらしさや、一時的な力では勝ち抜けません。聖戰の立派な目的達成の日本人の使命が身體中にみなぎつてゐなければ不斷の力は出て來ないのです。

×
うそもなければいつはりもない至誠心からほとばしる法然上人の念佛、彌陀の願力をひたすらにたのむ南無阿彌陀佛、上人の欣求淨土の熱意こそ日課稱名六萬遍の不斷の力とはなつてゐるのです。

今一ふんばつ力を入れて最後の峠さへ踏み切れば貨車は自らの重みで自然とところがり出して行くのです。本願の船に乗じて生死の海を渡り切る様にです。

私は今總ての方面にその力の入れ方に今一應強い反省をして見ねばならないと思つてゐます。

依然足りなくとも、縣民の氣持はぐつと明るくなるであらう」と。

しかしこのことは獨り爲政者ばかりではな

い。上は指導階級から下は給仕に至るまで、己が非才を詫びる氣持の缺除してゐる點で同じことである。ことごとくにやれ不足だ、やれ

隘路だと云つて困難を數へあげて萬事濟まし顔である。逆に若し抗議され、叱言を云はれやうものなら、すぐいきり立つてしまふ。

誰も彼も臭い者身知らずであり、身勝手なのである。それを「己れ獨り正しい」と決めてゐる。宗祖上人さへもが御自分から「十惡

の法然房、愚痴の法然房」と云はれたことを憶へば、完全な人は一人もないことが知れる

近頃親切心が無いといふ。思ひやり、明るい氣分が足らぬといふ。しかし佛教徒なら四

恩に感謝し、掌を合せて拜む氣持の持ち主である。合掌の心は、すべてを恵みとみて有

難いと感じ、自己を省みて他に詫びる心である。誰でも忙しい。一人で二役三役を引き受

けてゐる。この忙しい中に信仰どころの話ではない、お念佛申す暇がない、と思ふところに實は缺陷がある。忙しければ忙しい程朝夕にもつと心から懺悔をしよう。



日本人の信仰

林 靈 法

もう一週間にもなる、風邪の熱が下らないため止むなく寝てゐると、今朝Kさんから電話で私に来て貰つて奥さんに少し信仰の話がしてほしい、といふことであつた。奥さんといふのは六十を少し越しての胃癪で、今日この頃では當人もそれと自覺してゐられるし、體の衰弱も近頃になつて目立つて來てゐるやうであつた。そこで親戚の人々が、その日頃の無信心を氣にかけて氣のたしかな中に信仰の一つも持たせて置きたいといふので、皆で相談して、私に依頼されて來たのだつた。

しかし、電話を受けても、この熱ではとても起きて出て行けそうでないで、二日三日も経てば熱も下るから、その上で參上することに約束をして置いた。靜かに天井を眺めながらその人の衰弱した顔貌を思ひ浮べてゐると、若し今夜にでも御當人に急變があつた場合にはどうなることだらう、魂の安住を得ないで、不安の中に、おのゝきながら死の恐怖に追ひ込まれてゆ

くその人の心持を思ふと、遽かにじつとして居られぬ氣持ちになつた。人生の一大事に何らの光りをも照せられずして息を引き取つてゆく人、それに對して責務を果さぬ誠意のない自分、私は思ひ切つて今からすぐ出かけてゆくことにしたのである。

御當人は割合にしつかりしてゐる。あゝした病氣の人に於ける如く病氣は大分に進んでこの一週間の位のものだといふのに、寢てはゐるもの、仲々に元氣である。私の顔を枕上に見るとすぐもう商賣のこと、息子のこと等について次から次へと愚痴話をつゞけられる。既に當人も自分の病氣の絶望のことについては自覺をしてをられると聞き、そんなことから佛さまのお話も聞く氣になつたといふことであつた。枕元に座つた私は靜かに先づ、老生不定、誰れもがこの人生にあつては必ず死すべきものだといふこと、そしてこの短い生涯において實は死んでも死なゝい大きな命のあること、このみ命に生き得る

ことが人間として一番に幸せである、この不死の大生命に乘換さして貰ふのが法然上人の南無阿彌陀佛の信仰です、とぼつ／＼と病人の體に障らぬやうに話して行つた。南無阿彌陀佛の信仰は死ぬためのものではない。それこそ本當に生きてゆくためのものである、人間の生命はこの六十年で終るのではない、この世の一生涯は無窮の世界に入るほんの入口である、私たちの眞の生涯、大活動といふものは、阿彌陀佛の眞實の世界に迎へ取られて、それから本當に始まるものである、この無窮に亘つて生きつゞけてゆくところに信仰に生き得る者の不滅の喜びがある、先きに行く人も決して死するのではない、それはこれから本當に生きてゆくための出發だ、後にのこる人も同じこと、かうしていろ／＼とお世話して下さる家内の人や親戚の人々も、皆が大きな一つのいのちの中に生きてゆけるのだ。どうか人間の生涯といふものは、たゞの五十年や六十年のものではないことを靜かに考へてお念佛を唱へていただきたい。私はこんな意味のことをぼつ／＼語りながら二時間ばかりも座つてゐたやうであつた。

側で私の話を一繼に聞いてゐた三男のH君、某大學の豫科在學でしかも學徒出陣を志願して

ある彼は、私の話が一段落すると、「お母さん、そんな氣の弱いことでは駄目ですよ、僕らがいまに出陣するのを見送つて貰はねばならんです、それまでは死んではいかんですよ」と母の顔を見つめながら話しかけて、同時に私の顔をふり向いてにこ／＼してゐた。

「この子は自分の命は二十五までです。僕らがあるからこそ、お母さんたちの日本は安全なのです。ひと筋に僕らは生きる道がはつきりしてゐると言ふて居ましてな、母の氣持も知らないで二言目にはあゝしたことがかりを言ふて居ります」

疲れた顔を私の方に向きかへて病の人ばかり言ひながら重い吐息をもらした。

いま私の前には同じやうに死に直視してゐる二人がある。

一人の母なる人は人の普通の道を歩いて來た人、財産も出來た、子供も立派に成長してゐる。世間から見ても先づ幸せな人である。然も人世の最後に至つて一番に大切なものを見失ふとしてゐる。人間誰れしも最後の宣告を受けたとき嚴かな自己反省に立ち還らざるものがあり得やう。生涯に犯して來た罪の数々、日頃わが身

可愛さのため思はず犯して來た罪もいまとなつてはひし／＼と胸の中に書き出されて來やう。

しかも、それにも増して死といふ嚴肅なるこの事實の前に立つては誰もが心のどん底より慄然たらざるを得ない。この時、この人は始めて佛

とは何か、お浄土はどこにあるか、どうすればそこに行きうるのか、水に溺れんとする者は手あたり次第につかまんとするのだ。こゝに生れた信心の心理内容には或は功利的なわがまゝなところが多いであらう、浄土門の本當の信仰ではないかも知れない。しかし、かうした不幸な人々に向つても浄土門の信仰は大きな役割をなして來た。たしかに不幸な人と言ふのである、この人世にいかにか成功を極むとも人生最大の幸せたる無窮の信仰に生き得ぬ人は人間として最大の失敗者であると斷ぜざるを得ないからだ。

これと對照して、私はこゝにまた生ける青年の信仰を見てゐる。疑の母を見まもる息子、胸奥には本當の浄土の信仰が生きてゐる。そしてこの事實は彼一人のものではない、いまの若い日本人は誰もが生きた宗教を持つてゐる。この弱小な自己を擡げ、大いなる生命の中に生きぬく道を知つてゐるのだ。一人の年老いた人は死の恐怖の中に佛を求め、安樂の浄土を求めてゐる。

それはやゝともすれば概念の世界におち、また低級な浄土の觀念に墮してゆくかも知れない。それに反して、今日の日本人は、日本臣民として今日一日眞實に生きぬくことの中にはつきりした佛のみ命に生き、また浄土の無窮の大大活動を味ひ得てゐるのだ。

われ生を知らず、焉ぞ死を知らん、と古賢は告白してゐるが、現在の一時時、今日の一日、また五十年の生涯を無にして、いづかたに自己の魂を安住さすべき境地が求められやう。現下の瞬間に眞實に生き得ずしてどうして無窮に生き得ることが出來やう。

わが法然上人によつて開顯された念佛の信仰はまさしく今日只今の生活に眞實に生きてゆくことであり、それがやがて無窮の國運の中に生きてゆくことを教へるものである。信仰は老人や閑人のものではない、浄土の信仰は青年のものである。然してわれら日本人の今日の生涯の原動力である。日本の若き人はいま生ける本當の宗教を持つてゐるのだ。信仰は寺院や殿堂の中に失はれてゆくかも知れない。しかし生命の信仰は益々燃えあがる。それは日本の國そのものが、宗教的地盤の上に育てあげられて來てゐる不退の國土だからである。

實話 法の時の雨



富は佛縁を妨げる

貴族書院記官

石橋徳作

一雨あつてもよかりさらなものにと、降りさうで降らない天氣を愚痴りながら、私は土曜日のので少し早目に家に歸つた。そして汗をふきふき幾通かの手紙に目を通してゐると、その中で神奈川縣茅ヶ崎眞壁文江といふ、もちろん見知らぬ婦人からの手紙に氣をひかれた。金釘流のたどくしい文字だが、讀んでゆく内に、私はその中にぐんぐん引き入れられてしまった。手紙の意味といふのは大體こんなものであつた。

限りはみな戸棚の奥に深く藏つてみたが、大人びた言葉のはしはしが耳につき、夜中にフト起されて目がさめ、あたりを見廻すのであつた。こうして遂には夢と現の分け難いやうな暮しになつてしまつた。いつそあの子の後を追つてと思はぬこともないが、無心に睡る次女の顔をみては如何に苦しくても自分だけが先きを急ぐわけにもゆかぬ。教へてくれる人があつて、同じ悲しみに憐れむ親達のことか言かれてあるといふ

「愛兒を亡つた人の慰み——一錢地藏緣起物語」を讀みたいものと思ひたつた。が本屋はもとより發行所にすら品切れとあつて、何うかお手許にあつたら是非とも譲つて欲しいと云ふ。それが出来ねば貸してくれるだけでもよいがとの依頼であつた。

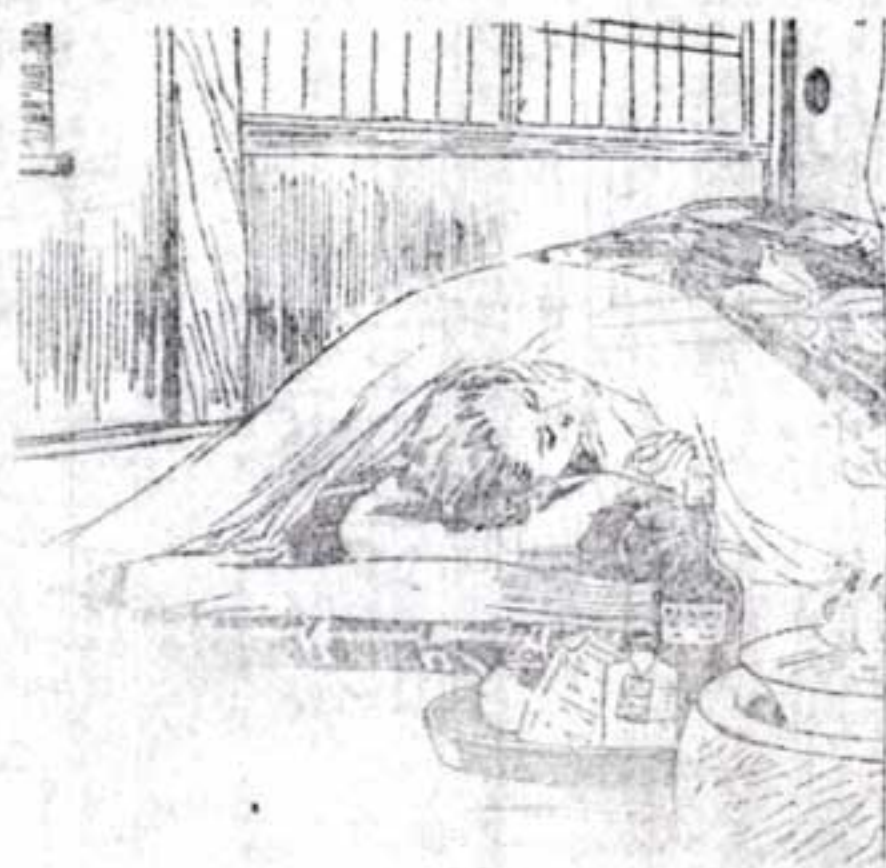
この本は以前發刊された拙著なので、私の所なら一部位はあらうかと頼み込んできたものらしい。飾り氣のない粗末な手紙だけに、切々たる思ひがにちみ出て、ひとを打つ力があつた。幸ひ明日は日曜である。私は早速茅ヶ崎まで直接見舞ひに行かうと心に決めた。日曜といつても他に済ましたい用事もあつたが、私はその手紙から何んとかく猶豫のならぬもの、萬一のことかあつてはといふ感じを受けた。ただ拙著を貸せとの依頼に過ぎなかつたが、郵送などしてゐたら、ことによつて間に合はぬかも知れぬと思はれた。尤もかく私の氣持をせかすには、一つの理由があつた。それはまだなま／＼しい私の一つの體験であつた。

神田に住む十八歳の久子さんといふ娘が、近所の八つと六つになる男の子を連れて蟬鈴でも捕らうと小春の方へ遊びに行つた。一日で陽焼けする程遊び廻つて、さて歸らうと驛の近くま

でやつてきた。すると向ふから電車が走つてくるのが見えた。急ぐ歸りでもないくせに、それあれに乗らんだと三人は一語になつて走つて行つた。だがその電車は、その驛には停まらぬ急行電車であつた。三人が土手の上の踏切りを走つて渡らうとした際、アツと云ふ間に三人は電車に撥ねとばされてしまつた。

三人の親たちの嘆きは見る者の目を潤はしめた。中でも附添ひ役で行つた久子さんの母親は自分の悲しみとその上に他の親達に對してすまない氣持から尙一層の苦しみ方で、半病人になつてゐた。私はこの時もお見舞ひに行き、拙著「愛兒を亡つた人の慰め」を一部贈つておいた。その時も母親は、遺骨の側で鉢巻をしながら床についてゐた。しかしその本が僅か一部であつたため、久子さんの父親は自分たちが見る前に他の二軒に見せたいと廻置に出してしまつた。やがてその本が久子さんの家に戻つてきた時はすでに遅かつた。悶々の苦しみに打ち敗けて床に就いてゐた母親は、もはやこの世の人ではなくなつてゐた。久子さんの父親は本を手にして若しこれが妻の生前に間に合つたなら、少しはあれの苦しみも薄らいだであらうにと、男泣きに哭いてゐた。

文江さんの手紙を讀んで、この記憶がまざまざ思ひ出され、嫌な豫感がしたので、用事を後にしても直接出掛けて行つたのである。その日は朝から雨で、風も可成り吹いてゐた。切符をやつと手に入れて、茅ヶ崎町に着いたのはもう午後三時頃であつたらうか。初めて降りた驛の



前に立つて、私はその町の案外廣いのに驚き、あちらで聞きこちらで買つてみたが、女名前で探したんでは、それらしい家が容易に聞き込めず文江さんの家を見つけるまでに仲々の苦勞があつた。それでもやつと探す番地の近くにたどりつき、軒下で働くお神さんに聞いてみた。す

るとその眞壁さんならあの洋館建ての家でせうと教へてくれた。その家はこの近邊での資産家であるが、最近幼い長女を亡くし、親たちの嘆きも大變ですとも云つてくれた。

風雨に打たれて重くなつてゐた足も急に元氣づき、私は掛け込むやうにその家に入つた。資産家といふだけあつて實に堂々たる構へであつた。立派な玄關を入ると、すぐ隣りの部屋に障子をすかして見事な佛壇が見えた。そこには白木の位牌があり、燈明、線香があげられてあつた。やがて出てきたその家の奥さんに、お手紙を戴いたが直接こうして持参したこと及び一通りのお悔みを述べ、折角來たから御回向のお經一つ讀ませて戴きたいと申し入れた。

すると奥さんは傲然たる態度で「それはお人違ひでせう」とただ一言答へるだけであつた。あゝさうか家を間違へたかと思つたが、實はこれこれのわけで御不幸のお家にはお見舞ひにあがつてゐるのだが、お詣りだけでもさせて欲しいと語を話してみたが、全くけんもほろろの挨拶で、私が金の無心にでも來たのかと、早く追ひ歸したい様子であつた。私は仕方なく佛縁なき人は止むを得ぬと諦めた。私はこうしたいやな仕打ちを受けたことも今

までは幾度かあつたので腰も立たなかつた。私は自分の怠慢からつひ修理を延ばしてゐた古井戸で長男を死なせてから同じ親の悲しみを共に慰め合ひ少しでも力になりたいと、若し不幸のあつた家とさへ聞けば、他人に教つてでも極力お見舞みに行き回向をさせてもらつてゐた。又それと同時に有志者からは一錢づゝの寄進を仰いで地蔵尊建立を發願し、それもやうやくこの程宿願たる百萬人をはるか超えた人々の一錢寄進を集め得て、長野善光寺にお地藏さまをまつることが出来たのである。従つて今までにいろ／＼な人にもお逢ひした。がその中で土地の有力者とか資産家とか地位が高ければ高い程、佛縁に遠いものであることを知つてゐた。或る富豪の家に見舞ひに行つて、私が自分の發願を述べた時、その主人から「そんなことでもせぬと諦めがつかんでせう」と簡単に追ひ歸された事もある。又御尤も／＼だけで相手にされずにしまつたこともある。そこへ行くとかへつて比較的貧しい暮しの人々は、こちらの好意をすぐ喜んでくれるし、更にまたいろ／＼と相談までかけてくれる人がある。

私は白木の位牌に向ひ僅かに黙禮したただけで寂しい氣持でその洋館建ての家を出た。しかし

幸ひそれから間もなく同じ苗字の文江さんの家を見つけることが出来た。文江さんは赤子を背にして夕餅の仕度で忙しうだつた。私は地蔵尊の誦して心から回向し、お悔みを述べ、急用があるからとすぐに辭退した。しかし文江さんはお茶一つでもと仰々歸さうとせず、今日



は丁度佛さまの四十九日に當るのも不思議な因縁であると喜んでくれた。夕方時間が悪いと思ひ、ふり切るやうにして家を出た。文江さんは雨の中を私の後から追つてきて見送つてくれた。曲り角の所まできて私がふり返つてみると何んと文江さんは私の後姿に掌を合せて拜んでゐるではないか。私はそれをみてハツと胸をつかれ、有難いやら嬉しいやら、己が責任の重

いことを憶ひ、實に感慨無量なものがあつた。歸途混む列車の中で私の頭はまた熱してゐた。家こそ貧しいが苦しみと苦しみとしてほんとの味ひ、ひたすら子供の冥福を祈る姿が目によきつゝいてゐた。純情な文江さんは必ずやその苦難を超へて信仰の明るみの中に入れるに違ひないと信じた。それに反してなまじ資産があつたり、地位のある人は、先づ以て人を疑はずにはゐられない性根がある。この疑ふ氣持のため素直になれず、信仰に入ることが出来ないのも當然だらう。古歌に

いくたびか法の時雨に遇ひながら

染むるに難き我がこころかな

といふのがある。ありとあらゆる機會に於て信仰に入り得るのである。われ／＼の生活の内には幾度となく、時雨のやうに降りしきる法に接してゐるわけである。それにも拘らず自分の心はその有難い教法に染んでくれない。多くは物質上の、いろいろな障害があつて、信仰の門口まで來てゐながらその中に入らうとせず、また入り損ねて去つてしまふ。私は立ち通しの列車の中で、あれこれと考へてゐる内に、少しの疲勞も覚えずして品川驛に着いてしまつた。

(姓名は全部假名)

信 仰 相 談

擔當 中 村 辨 康

決戦下の佛事と佛式結婚

(問)

佛事も決戦型でつとめる
とよいと申されますが、

何う云ふやうにやつたらよいでせうか。眞宗や神道は餘りお供物や食事をしないからよいですが、一般にはそれをするので、現在すべて配給でまかなはねばならぬとすれば中々法事もやれません。此の決戦下にどうしたらよいでせうか
それからお寺で亡き人の靈ばかり拜むのでなく、決戦型で佛前結婚をするやうになりましたがその佛式結婚の作法をお教へ下さい。

(答)

(青森、平館村、丸尾久二)

佛事を営むのにお供もの
をしなければならぬと云ふことはありません。そこに誠意誠意がこめられてあれば何もなくても差支へないのです。神道では

お水、お洗米、川魚、海魚、鳥、野菜、海藻、味噌、注連縄などが用ひられ、眞宗では圓筒型に書いたお佛供飯、圓筒型に高く積み上げた乾菓子、お菓子などかなり澤山な品物が供へられますから、決して眞宗や神道が簡略だとは言へないので、むしろ逆に他よりも嚴格な位であります。何處をさしておつしやつたのか知りませんが、若しあなたの土地がさうであるからと云つて全國皆なさうだとは言へません。若し眞宗や神道が簡略でやつて居られるならば、それは文字通り元來復讐のものを簡略にしたまでのものでありませう。随つて他の宗旨と雖も簡略にしてよい譯で、那一段之をどうかと決定する必要はないと思ひます。時に應

じ分に應じて充分誠意を表はしたらいよいでせうと思ひます。
都會ではお菓子は勿論のこと何もありませんから、配給になつた野菜を多少心がけて置いてお供物に使用し、それをお下げて家庭のお惣菜にして居る状態です。から、極めて簡便でありますし、また來客には食事を出しません。お茶だけで堪忍して頂いて居るやうな有様です。先日ある御家の法事によばれて行きましたが、そこでは牡丹餅を三つ出しました。一は黒ごま、一はきな粉、一は小豆でした。白い砂糖がホンの少し(耳かきに二三杯位)その上につて居りました。非常においしさうに見えましたので、お客一同は早速之を頂戴いたしました。實は砂糖氣は少しもないのでした。つまり砂糖はその上につて居た少量だけであつて、まぶしてある胡麻や黄粉やつぶしあんには糖分が用ひられて居なかつたのでありま

す。然しそのもち米や小豆や胡麻や黄粉等の物そのものが既に貴重品に屬するものであつて、容易のことて手に入る品物ではありません。んから、お客一同は非常な感謝を以て頂いたのであります。
實際はお茶だけで結構なのです。こんな心配は却つて恐縮を感じずる位です。ですからかうしなければならぬとか、あゝしなければならぬとかきめることはよくないことと思ひます。夫々分に應じて出来る範圍の誠意を盡すところによい點があるのではありますまいか。若しきめるならば何もせぬ最低のことをきめなければなりません。が、それでは一見よいやうで居て、實は意味をなさず、殺風景になつて遂には法事そのものさへやらぬやうにもなりませう。
次に佛式結婚の作法は「淨土宗法要集」の中にありますから、大體それに依つて必要に依り取捨増減してやつて下さい。

但しあの中に「盃事」が佛前で行はれるやうなつてあるのは少し變でありまして、佛法としては遠式だと思ひます。酒は佛教では「不飲酒戒」として禁じられてあるものであり、覺悟を中心にして陶酔を何處までも排除せんとする佛教が陶酔の飲料を、しかも佛前で飲み合ふと云ふことは「佛式」に違ふものと考へます。法然上人も「浮世のならひ」と云つて世間で用ゐることを大目に見られはしましたが、それは要するに内證事でありまして、佛前で正々堂々とやることからはありません。あれは法式協會の方々の千慮の一失であります。或は結婚そのことが既に正式には佛前でなされ得ることとてなく請はゞ「世間事」であるのにそれを敢へてなす以上は世間事の「盃事」をしても差支へないではないかと云ふお考へからそれが式中に取り入れられたのかも知れませんが、結婚は人倫の大

本であつて既に優婆塞優婆夷を認めて居る以上、佛前で擧式の出来ない筈はありません。教團内部の制裁の中には「不邪淫戒」があつて結婚を許して居りませんが、それは教團内部のことであり、謂はゞ「學校の規則」であります。學生が寄宿舎生活をして居る時、そこで他をはばからずに結婚生活をしてはならないのと同じことで、それは申すまでもないのであります。然しだからと云つて教團外的生活に夫婦生活を禁じて居るわけは決してありません。それではその民族は滅亡してしまひます。佛教は國民の覺醒を要求しその隆昌をこそ望みますが、種族の滅亡を求めて居るものではありません。考へを凝練させたから、こんなことになつたのかと思ひます。若し世間にならつて盃事をしなければならぬのであるならば、それは別室でおやりになつて然るべきことかと思ひます。

工員と念佛

(問)

私は目下川崎の〇〇工場に職務し、職長として二十名の少年工員を豫つて居ります。起居は共にしますが、職場では親としての責任を感じて居ます。何分はるかに故郷から離れた少年ばかり故、その何かしら空虚を感じずる心をいやしてやらうと勵心して居ります。それで私は自分が日頃信仰して居る念佛を仕事の前後に唱へさせることにしました。それは御先祖にお祈りして自分の心を清めやうではないかと云ふ譯です。然し何となく皆んなの心には添はないらしいです。念佛と云ふ形式が苦しいらしいです。よいことだとは思つて居るらしいですが爺さん婆さんと云ふ觀念に左右されるやうです。何か若い心を把へる説明に缺けて居るからではないでせうか。念佛が秘達の生活に直接必要であることを判り易く御教示願へませんでせうか。

(答)

むつかしい問題で到底秘には荷が勝ち過ぎて御満足行くやうな答辯は出来ないかも知れませんが強いて申し上げますとこれには二つの難點があるやうに思ひます。第一には念佛を形式の上にのみ考へて居られること、第二には信仰なき者に無理に宗教形式を行はしめんとすることあります。念佛とは一體何なのでせうか。行なのでせうか。それとも、信の表現なのでせうか。眞宗に言ふところの「信の座」「行の座」に別れてすはつた昔の語などもその元はこの問題を解明しやうとする意圖だつたのでありませう。若し單に信だけのものならば、一度纏へたらそれでよいではないかと云ふ問題も派生してつまり「一念義」と云ふことが起りますし、また行と云ふのみするならば、やるだけよいと

云ふことなつて、多念義が生じて來ます。之は法然上人の自力他力の御法語が明かに御示しになつて居るやうに「心と行とが具足」するものでなくてはなりません。戦立のものは許されないので。然かも佛教の目的は「私心」をなくして天地の大生命の中に生きるところの「解脱」を求め菩提を求むるところにあるのであつて、各々が私心なく無我になつて、職域で全分の奉公をなすべきでありますし、またその心を擴充増上せしめるのが「増進菩提」であるわけでもありますから、その心を成就させる爲に三學とか六波羅蜜とか云ふ「行」があるのであり、その聖道門の「行」にかはるに淨土門の念佛があるのであつて、畢竟「念佛」は一面に於ては如來の他力に一切を委かせ切つた無我心を養ふものであります。

また念佛は阿彌陀佛に歸命する心情を表現する一つの形式であつて、此の外にも觀察し懺悔し讃嘆し供養する身業や意業の念佛があるものであり、まして、何れも如來機に歸命する心情に於いては同じである云へます。

然しながらこの身口意の三業の中で最も簡單なのは稱名行でありますし、最も端的に己が感情を表現し得るものも稱名行でありますから、善導大師はこの點に着目されて「念佛是一」と斷定されたのではないかと思ひます。精神内容の意味から云ふならば「念」と「稱」の關係ばかりでなく、「拜」と「念」の關係に於いても「供養」と「念」佛との關係に於いても「讃嘆」と「念佛」との關係に於ても皆な同じであつて「拜即念」であり「讚即念」であります。されば單に形式だけを論ずるならば必ずしも口業の稱名行のみに限定しなくてもよいではないかと思ひます。淨土宗でこそ稱名を正定業として居りますが、宗派に關係のないものか

ら見ればもつと自由に考へられなこともないでせう。況して人には先入觀念がありますから、すべてを一列一體に取り扱ふときはその先入觀念との衝突はまぬかれず、殊に宗教觀念のない者に唯だ形だけの念佛を強いるならばそこに反抗的な氣分が起り勝でもありません。唯だそれが直ちに生活資料に關係がないことですし、今まで宗教信仰などは至極輕く考へて「どうでもよい」位に思つて居たことでもあるから、上役の人の命令とあらば黙つてきいてやつても擬の行かないことだとして、念佛は唱へるでせう。そんな譯ですか、心に添はないものがあるでせうし、心苦しいことにも思はれる譯でもあります。

それ故之の處置としては二通りあると思ひます。一は無理でも理窟なしに押し通して引きつづて行くことです。そしてもう一つは段々に理解を求めて行くことです。

あなたの御質問は第二の方法であつて多少の理窟で念佛をわからせやうとするお考へですが、まだ年の行かない少年に深い宗教の理窟がわかるわけありませんから、初めはあなたの仰しやつたやうに「御先祖にお祈りして自分の心を清めやうではないか」と云ふ位の程度が先づ上乘ではないでせうか。一邊にわからせやうとしたところでそれは無理と思ひます。殊に信仰が説明だけですぐ心を把へ得るならば誠に結構なことです。若しそれが出來れば世の中に求道の苦心もいらす、ちよつと聞いてちよつと信仰に入れると云ふ簡單なことになり古來から求道して苦心に苦心を重ねて居るものは實に馬鹿の標本と云ふことにもなつてしまひます。一度私の方へ直接御訪ね下さるか、それとも鐵會發行の「信仰問答」でも御覽下さるならば多少の参考にならうかと思ひます。



皆得休息 皆蒙解脱

法然上人法語解説(其三十五)

中村 辨 康

法語

當時、日毎のお念佛をも、かつ廻向しまいらせ候べし。亡き人のために念佛を廻向し候へば、阿彌陀ほとけ光をはなちん、地獄、餓鬼、畜生を照らしたまひ候へば、この三惡道にしづみて苦を受くるもの、その苦しみやすまりて命おはりてのち解脱すべきにて候。大經にいはいはく
若在三途勸苦之處。見此光明皆得休息。無復苦惱壽終之後皆蒙解脱。
といへり。

解説

(或人の許に使はず御消息(法語抄二五〇))

三途とは刀途、火途、血途で畢竟兵災の苦惱から想ひ及ぼしたものであらうと思はれますが、謂ゆる地獄の變相な

るものがそれであります。それを三つの途の「三途」とも書いて地獄道、餓鬼道、畜生道の三通りの行き方になぞらへて居るのであります。

謡曲の「大原御幸」には戦場の有様を六道に譬へてかいてありますが、昔にもかう云つた考のあつたことはこの三途六道の思想發展上の消息を物語るものではないかと思ひます。

自我思想を根底とする限り地獄餓鬼畜生の三惡道はまぬかれません。慾の爲には自分も他人もなく、血で血を洗ふ事にもなりますし、骨身をけづられるやうな苦しみや儼み(げんみ)を味はねばなりません。それは現實にもあり得ることです。から、尙更未來永遠にもそれが續く筈であつて、死んだら凡てが御破算になるなぞと考へるなればそれは飛んでもない手前勝手(てまへかたて)の利己主義であります。

私達の考へは煩惱のことを「結」とも云つて居るやうに、凡てのものを「固定」させて考へて居るのであります。

す。つまり「執着」なのであります。金に執着し名譽に執着し先入觀念に執着し、一つとして執着ならざるものはありません。生活の凡てに執着して居るのですから、この「結ばれ」なるものは執着心がとれない限り解ける筈がありません。

この「結ばれ」が地獄道となり餓鬼道となり畜生道となつて或は連續し又は輪廻し流轉して居るのですが、これが私達の過去でもありまた未來でもあるのであります。

椎尾博士は三惡道のことを

一、地獄道——嫌や／＼働く
二、餓鬼道——欲しくて働く
三、畜生道——分らずに働く
と云つて居られますが「道」を「生活」のことと解すればそれは事實でもあり眞理でもありません。現實を離れた宗教は有り得ないからであります。即ち現實生活から遊離したところの觀念に依つて想定したもので、本當の宗教でもなく本當の思想でもありません。よく世間で「地獄極樂」など云ふものはありはしない」などと云ひますが、そう云つて居る人が既に「存在觀念」に捉はれて居るのであつて、先づその人の存在觀を打破らない限りその議論に對する答辨は無益であります。

一切の森羅萬象は空間を占めて居て「存在」らしい相を

現はして居るけれども、それは決して單なる存在ではありません。皆な生命的現象であり變易様相であり時間的流轉相であるのであります。凡ては動いて居るものであり、凡ては流れて居るものであります。即ち時間を見捨てた空間はあり得ません。

然るに凡ての人々は時間と空間とを別々に考へて居て、單獨な時間、單獨な空間として居ります。殊に「物」に對しては「我が所有」として愛着しまた「我」そのものには特に強く執着して「惑、業、苦」の輪廻をつゞけて居るのであります。

無量壽經の五惡段の處には諸天人民蠕動の類、衆々の惡をなさんと欲す、皆な然らずと云ふことなし。強き者は弱きを伏し轉た相剋賊し殘害殺戮して迭ひに相吞噬す。善を修することを知らず、惡逆無道なり。後に殃罰を受けて自然に趣向す。と云つて居り、更に之につゞけて

神明記識して犯せる者を赦さず、故に貧窮下賤乞匄孤獨瞽盲瘡癰愚痴弊惡なるもの有り、狂不逮の屬あるに至る。

また尊貴豪富高才明達なるものあり、皆な宿世の慈孝修善積德の致すところに由る。世に常の道の王法の牢獄あれどもあへて畏れ愼まず、惡をつくり罪に入つてその

殃罰を受く、解脱を求め望めども免れ出ることを得ず。世間に此の目前の事あり、壽終つて後世に甚だ深く甚だ劇し。其幽冥に入て生を轉じて身を受く譬へば王法の痛苦極刑の如し故に自然の三途無量の苦惱あり。其身を轉質し形を改め道を易ふ。受くるところの壽命或は長く或は短し。魂神精識自然に之に趣く。當さに獨り値ひ向ひ相從つて共に生ずべし。たがひに報復して絶え已むことあることなし。殃惡未だ盡きざれば相離るゝことを得ず。其の中に展轉して出期あることなく解脱を得がたし、痛み言ふべからず。天地の間に自然に是れあり。即時にたちまちに應至せずと雖も、善惡の道かならずこれに歸すべし。

と云つて居ります。これは五惡の中の一惡を擧げただけでありますが、惑業の致すところ一切の業に對する應報の苦しきは止むを得ないことで、如何に苦しんでもそれからまぬかれることは出来ません。

然るに今私達が如來様の光明を頂いて、事毎に感謝のこころを以て日常の生活をやらせて頂けるなれば、そこには心の結ばれも自然に解けて苦惱から脱却することが出来るのであります。誠に有りがたいことであつて、是れ偏へに他力増上縁、如來本願強縁の致すところであります。この御法語は或る人が前條十ヶ條のことをお質ね申し上

げたのに對して御返事遊ばされた御消息の一節であります。

「逆修」と云つて、まだ死んだわけではないが、假に死去したことにして後世のとひ吊ひを前以てして置くことがありますが、その事について御返事をなさつた序でに、亡き人の菩提を回向する功德に對する念佛の有り難さを示されたものであります。

念佛して亡き人の菩提を回向すれば、阿彌陀佛の光明は三惡道のすみ／＼までをもくまなく照らすから、たとへ三惡道の苦を受けて念佛する暇のないものであつても、その光明に照らされて心も明るく晴れやかになり休息することが出来る云ふのです。

それを無量壽經の光明歎德章の文句を引いて、懇ろに示されたのであります。

地獄の底までも照らして明るくして下さることは誠に無邊光の御德であり、炎王光の御力であり、歡喜光の御育てあると感謝せずには居られません。

(附記)

この法語解説も大變永く續きましたが、あと一回で終りにいたします。そして私は暫く休ませて頂きます。何れ編輯部の方から豫告が出て誰か連續執筆をして下さることと存じます。御諒承を御願ひいたします。

壇歌



投稿 官製ハガキにて編
規定 輯部歌壇係宛へ

みいくさに捧げむいのちひたすらに守り来にけり補充兵われは

静岡市 杉浦敏夫

サイパンの婦女の自決を傳へたる敵側の記事讀みてわが哭く

新潟市 梶修二

サイパンはなど遠からむわが王士敏に侵さる忍ぶべけんや

香川県 柱眞隆

追撃にうつれる騎馬の一隊はおのが土埃にかくれつつ行く

京都 澤井茂雄

裏切りの熱き煮湯もさりげなく笑ひてわれの堪へしなれども

東京 阿部千代

物の芽を庭の隅より移植しぬ秋深めども日浴びて伸びよ

選者 詠

蓬萊の島山めぐり波高し仇の醜態侵さんと來つ

栃木縣 大輪清

わた中の那覇の城さへ焼かれたり海龍王上激しく怒れ

忍ぶべき界は越えぬわれ蔑し驕れる敵を今ぞ撃つべし

宿怨の敵第五十八部隊捕へて撃たん天の時來ぬ

敵見ゆと索敵機告ぐすはと飛ぶ日に夜をついで攻めに攻めよる

大君を安んじまつれこの敵を逃さば生きて何の甲斐そも

大みいづあきらかなれや我國を覗ふ敵のはかなき末路

忠靈もみそなはしませ敵空母轟撃沈すおよそ十ほど

勝どきの萬歳すらも惜しみつつひたに追ひ行く生産陣も

黒潮は常のごとくに流るらん敵艦あまた中に呑みつつ
(十月十六日大戦果發表の夜に)

壇俳

太田耳動子選



投稿 官製ハガキにて編
規定 輯部俳壇係宛へ

かなしさに颯々となふ秋の空

姫路市 三木光子

夏を母には見せじ髯を剃る

京都傷療 澤井弘陽

秋晴やつはもの列車ながく行く

鳥根傷療 林良碩

はたゝがみまとも板戸開しけり

高知縣 竹原教圓

咲きそめし萩にふるれば沈みけり

京都府 藤田清城

我庭の眺めや擬寶珠今日さける

平壤府 三浦砂千子

秋灯や母の假名文字こまゝと

兵庫傷療 池田盛雄

行水の名残の鹽輪替して

岩國市 長岡白朝居

ふる里や朝霧の雲荒の上

岡谷市 久保田穰

三柱の御靈鑑みて瀧の秋

東京都 山本竹泉

朝露の電車工員詰めきりて

龜田傷療 續木元房

風道の明るう透ける芒かな

高知縣 平野雪女

川を越す蟬鈴羽根をひからする

京都傷療 野村孟志

み佛に袈裟をあづけて稲を刈る

東京都 狩野智祥

瑠璃こゆき朝の稲の咲きにほふ

新潟市 梶修一路

なかほどに雲がうつりて澄の秋

香川縣 柱眞隆

鷹の足散りしく花に眞紅

静岡市 杉浦敏夫

赤蟬鈴の窓をよぎりて黄昏るゝ

龜田傷療 高島嘉八郎

學校に警戒鷹や秋出水

名古屋 堀場典雄

常會のたれもかれもが蕭ぶくれて

京都傷療 稻葉兩堂

高知縣 横山高圓

靜岡市 孤舟

椎尾 辨匡 序
中村 辨康
林 靈 法 著

法然上人を憶ふ

B 6 版四四〇頁 實費三圓（送料共）

著者はかつて變動期の思想運動に活躍し、圀圖にあつて兩親を失ひ信仰上に動搖を味ひ、絶望のドン底より遂に法然上人の信仰によつて復活し大信日本の命に感奮せる眞人である。本書は是の血と涙の體驗告白を以て上人を語れるもの、椎尾博士、中村辨康師またその純眞なる求道に隨喜の涙を寄せらる。

郁芳管長猊下名號御執筆

淨土宗日常勤行式

頒價八十五錢（送料六錢）
折本、縦五寸五分、横二寸五分

申込所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

○振替にてお拂込の場合は何れも十錢増のこと○

編輯後記

◇臺灣並に比島の沖に敵大艦隊を撃滅するの大戦果が擧つた。眞珠灣の大戦果にしろ今回のそれにしろ以前ならずでに戦ひの大勢を決し得た程のものである、が大損害を乗り越へ更に侵攻し来る所に今次戦争の規模が窺へます。

◇「前線の將兵に兵器の不足を以て嘆かしむるな。」銃後一億の合言はただこれだけであります。

◇本誌發行が次第に遅れて申し譯ありません。主として印刷その他の能力、輸送といった方面で押せ押せに遅れるためであります。

◇しかしこのまゝでは正月が過ぎたところに前年の十二月號といふことになりますので、止むなく十一二合併號としました。内容もそれだけ充實したため増頁しました。

◇副總裁六花眞哉師は遂に九月十九日西遷されました。即運社性譽上人見阿如實道眞哉大和尚、合掌

淨土 土・十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和九年十月三日印刷納本
昭和九年十二月一日發行

（定價十二錢）

東京都芝區芝公園十五號明照會館

編輯兼 眞野正順
發行人

東京都芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 村瀬秀雄

東京都牛込區市谷加賀町一ノ二二
（東京一）

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番
會員番號二二五・一七八

「淨土」購讀規定

定價 金十二錢

（送料二錢）

會費 金一圓六十錢

一ケ年

（送料共）

振替拂込はすべて十錢増のものと